

# コミュニケーション不安と自己意識との 関係性について

笠原正秀\*

The Relations between Communication Apprehension  
and Self-Consciousness

Masahide KASAHARA

## Abstract

The purpose of this article to examine the relations between communication apprehension: CA and self-consciousness: SC. In order to establish this relationship, Personal Report of Communication Apprehension: PRCA-24 (McCroskey, 1997a) was used for measuring CA, and Private-self Consciousness Scale (Fenigsten, Scheier & Buss, 1975 cited from Buss, 1986) and Public-self Consciousness Scale (Fenigsten, Scheier & Buss, 1975 cited from Buss, 1986) were applied for measuring SC. Throughout this research, the tendencies of CA and SC among Japanese were confirmed, and the degree of correlation between CA and SC was clarified. Some sexual/gender differences were found in correlation between CA and SC. Specific numerical figures are shown in the article.

## 1. 本研究の目的

本研究の目的は、コミュニケーション不安 (communication apprehension: CA, 以下 CA と記す) とその関連因子として考えられる自己意識 (self-consciousness: SC, 以下 SC と記す) との関係性を探査することにある。

対人不安 (social anxiety: SA, 以下 SA と記す) 及びシャイネス (shyness) と SC との関係性については、Leary (1983) [リアリィ, 1998] や Buss (1986) [バス, 1997] により指摘されている点である<sup>1)</sup>。SC は、SA の隣接領域でもある CA においても何らかの関係性があるものと推測される。両者間の相関係数<sup>2)</sup>を測定することにより、各コミュニケーション場面 (小集団内での議論及び討論・集会や授業などでの発言・1対1の会話・大勢

---

\* 国際コミュニケーション学部 国際言語コミュニケーション学科

の人を前にしてのスピーチ)におけるCAとSCの相関を個別に検証し、どの場面のCAとSC<sup>3)</sup>は関係性が深いか、またCA総計値との関係についても数値的に提示したいと考えている。

## 2. 使用概念と仮説

### A. CA

CAは、McCroskey (1970)により初めてスピーチ・コミュニケーションの分野に導入された概念で、以下のように定義されている。“an individual’s level of fear or anxiety associated with either real or anticipated communication with another person or persons” (McCroskey, 1997a, p. 82) [「実際の、あるいは想像上の対人コミュニケーションに関連した恐怖あるいは不安のレベル」(近藤訳, 1996, p. 9)]。つまり、実際に対人コミュニケーションを行っているときだけでなく、そうした場面や状況を考えただけでも生じるものであることを示している。当初は、スピーチ場面に特化したものであったが、その他の口頭でのコミュニケーション場面を網羅していないことに気づき、その後、Personal Report of Communication Apprehension: PRCA-24 (以下、PRCA-24と記す)<sup>4)</sup>(McCroskey, 1997b)に到った。

こうした不安・懸念 (apprehension) 測定に関する調査用紙には、実に様々なものが開発されている (e.g. Daly & Miller, 1975; Andersen, Andersen, & Garrison, 1978; McCroskey & Richmond, 1982等)<sup>5)</sup>。本研究では、対人コミュニケーション、特に口頭におけるコミュニケーション場面を主眼にしているため、PRCA-24を使用した。

PRCA-24は、各項目間の信頼性が高く、ほとんどの研究において.90以上の相関を示している (Leary, 1983 [リアリィ, 1998])。つまり、基準の妥当性も十分に証明されているものといえる。こうした信憑性の高さからPRCA-24を利用した調査報告は多々あり、その中でも特に日本人のCA値の高さについては、数多くの報告がなされている (e.g. 西田, 1988; Klopf, 1997等)。本調査においても、これまでの調査報告同様、高いCA値が示されるものと推測される。

### B. SC

Fenigstein et al. (1975)によれば、SCとは“consistent tendency of persons to direct attention inward or outward” (p. 522)と示されている。つまり、「自分自身の内側もしくは外側に向ける注意の一貫した傾向」(拙訳)ということである。自分自身である自己 (self) には、私的自己 (private self) と公的自己 (public self) の2側面があり、私的SC (private self-consciousness, 以下Pr.SCと記す) と公的SC (public self-consciousness, 以下Pu.SCと記す) とに下位区分されている。

Pr.SCは、Jung (1933)の内向性 (introversion) の概念や内的な思考や感情に向ける注意に関連したものと類似している。また、Pu.SCは、他者との関係における自己に対する一般的な気づきに類するものである。これはMead (1934)のいう自己を社会的対象物という考え方に連関するものがある。こうしたSCが人間の行動に影響を与えることはさまざまな調査により報告がなされている (e.g., Brockner, 1979; Buss, 1980; Fenigstein, 1979;

Lloyd, Paulsen, & Brockner, 1983; Scheier, 1976; Scheier, Buss, & Buss, 1978; Scheire & Carver, 1977, 1981)。

SCにみられる年齢および性差について、押見(1999)は以下のような指摘をしている。Pr.SCは男性も女性も23-24歳頃にピークを迎え、その後あまり変化は見られない傾向にある。また、Pu.SCは15歳頃にピークを迎え、その後、年齢が上がるにつれて徐々に低下する傾向が見られる。また、Pu.SCについては年齢層の若い男女の間に顕著な差が見られ、男性よりも女性の方が高値を示す傾向がある。本調査の対象者も大学生という比較的若い世代を対象として行っているため、こうした傾向がみられるものと推測される。

また、文化という視点から日本人のSCの特性について、以下のような指摘がある。「男らしい文化 [Masculinity]」<sup>6)</sup>であり、かつ「高不確実性回避文化 [High Uncertainty Avoidance]」<sup>7)</sup>に属する日本人の場合、Pr.SCに高い値を示すものと考えられる (Gudykunst & Ting-Toomey with Chua, 1988)。この意見は上述のものとは相反するものであり、非常に興味深い指摘である。

こうした双方の指摘を踏まえ、本研究では、どのような数値がPu.SCとPr.SCの両者に表れてくるのか、またCAとの相関において、Pu.SCとPr.SCのどちらがより強くその関係性を示すのかを確認したいと考えている。

### 3. 調査実施

#### A. 調査協力者

本調査に協力してくれたのは、計280人(男性46人、女性234人)の中京圏(名古屋市:1校、瀬戸市:1校)にある2大学の学生である。年齢幅は、18歳から27歳(男性:20-21, 女性:18-27)であった(全体: $M=20.09$ ,  $SD=1.04$ ,  $Mo=20$ , 男性: $M=20.61$ ,  $SD=0.49$ ,  $Mo=21$ , 女性: $M=19.99$ ,  $SD=1.08$ ,  $Mo=20$ )。

#### B. 手順

調査用紙の配布および依頼は、2003年度より継続的に調査者の担当する授業等を通して行ってきたものである。協力者はあくまでも自主的な参加であり、調査用紙の提出について何ら強制力を持たせるような条件は一切設けることなく実施した。つまり、調査用紙の回答から提出に至るまですべて協力者が自主的に行ったのである。ただし、調査協力者に対する調査者の側からできる貢献として、集計作業終了後、協力者が自分の記入した回答結果からどのような数値が算出されたのかを個別に聞きたいという希望のある者に対しては、本人の数値を教え、その数値から読み取れる内容を教える機会を持った。そのため、そうした希望のある場合のみ、本人のメールアドレスを記してもらったようにした。

#### C. 調査用紙とデータ処理

本調査において、CAの測定に際しては、信憑性の高さからPRCA-24の翻訳版(近藤, 1996)に修正を加えたもの<sup>8)</sup>を用いた。また、Pr.SCとPu.SCの測定にはSC尺度(Self-consciousness Scale: SCS, 以下SCSと記す)(Fenigstein, Scheire, & Buss, 1975)の翻訳修正版(押見, 1999)を用いた。SCSにはSA測定の質問項目も含まれているが、本稿中での

議論の中心はCAとSCとの関係性とし、SAを測定する項目もそのまま回答してもらい数値の算出も行っているが、本稿中では議論の対象としては触れないものとする。

収集したデータの処理はSPSS 13.0J for windowsを使い、平均値、F検定、t検定、rを求めた。もちろんであるが、それぞれの標準偏差(SD)も算出している。また、F検定、t検定、rに関しては、両側検定による有意確率(p)も求めている<sup>9)</sup>。

#### 4. 結果及び発見

##### A. CA測定結果

本調査において、CAの各下位尺度<sup>10)</sup>および総点は以下のような数値が算出された。小集団内での議論・討論19.1(男性=18.3, 女性=19.3), 集会や授業での発言20.3(男性=19.0, 女性=20.5), 1対1の会話17.0(男性=16.8, 女性=17.0), 大勢の人の前でのスピーチ21.1(男性=19.9, 女性=21.3), CA総計77.3(男性=73.9, 女性=78.0)であった(N=280: 男性=46, 女性=234)。これまでの先行調査の結果と同様、スピーチ場面、集会場面、小集団場面、1対1の会話場面の順に高い数値が示された。

また、全項目にわたり男性よりも女性の方が高い数値を示した。この点についても、これまでの先行調査と同様の傾向がみられるが、本稿発表段階では、収集したデータが女性の人数に比べ、男性の人数が限られていたこともあり、その平均値に有意な差があるかを確認するため、F検定およびt検定を行ったが、有意な差は確認されなかった(p>.05, n.s)。これらを表化したものがTable 1である。

この結果をもとにMcCroskey(1997b)に従い80以上を高CAとした場合、132人(男性=19, 女性=113)が該当し、調査協力者全体の47.1%(男性=41.3%, 女性=48.3%)であった<sup>11)</sup>。また、Klopf(1997)に従い70以上を高CAとした場合、191人(男性=28, 女性=163)が該当し、調査協力者全体の68.2%(男性=60.9%, 女性=69.7%)であった。一方、低CAとされる50以下は、全体で20人(男性=5, 女性=15)が該当し、調査協力者全体の7.1%(男性=10.9%, 女性=6.4%)であった。

こうした結果からも、いかに日本人が口頭におけるコミュニケーションやそうしたコ

Table 1 PRCA-24集計結果 (N=280: 男性 n=46, 女性 n=234)

CA 範疇 調査協力者	小集団内での 議論・討論	集会や授業 での発言	1対1の会話	大勢の人の前 でのスピーチ	CA 総計
男 性	18.3	19.0	16.8	19.9	73.9
SD	5.31	5.19	4.23	5.11	17.05
女 性	19.3	20.5	17.0	21.3	78.2
SD	5.15	5.01	4.66	5.49	17.00
男女総計	19.2	20.3	17.0	21.1	77.5
SD	5.18	5.07	4.59	5.44	17.05
F 値	.00	.04	.21	.53	.01
t 値	-1.27	-1.90	-.32	-1.57	-1.54

\*p<.05, \*\*p<.01, n.s.(p>.05), df=278

コミュニケーション場面に対して不安感や懸念を抱いているかがうかがえる数値となっている。これまでの先行調査結果と比べてみても、傾向としては何ら変わっていないといえる。近年、日本人の、特に若い世代の言語使用のあり方の変容も取りざたされているが、根本的な部分において変わらない日本人の姿がみえる。

## B. SC (Pr.SC vs. Pu.SC) 測定結果

Pu.SC と Pr.SC については、それぞれ以下のような数値が算出された。Pu.SC の総計 34.1 (男性=32.4, 女性=34.5) であった。Pr.SC の総計 28.7 (男性=29.8, 女性=28.4) であった。Pu.SC に関しては、男性よりも女性の方が高い数値として表れた。この点については、2.B. ですでに指摘の通り、これまでの先行調査と同様の結果といえる。また逆に Pr.SC に関しては、女性よりも男性の方が高い数値として表れた。女性は Pu.SC を強く意識し、男性は Pr.SC を強く意識するといえることができる。つまり、女性は他者から見られる自分自身を意識し、男性は自分自身の内側に目を向ける内向的傾向があるといえる。

前出の通り、本稿発表段階では、収集したデータが女性の人数に比べ、男性の人数が限られていたこともあり、その平均値に有意な差があるかを確認するために  $F$  検定および  $t$  検定を行った。その結果、Pu.SC ( $t=-2.74, df=278, p<.01$ ), Pr.SC ( $t=2.15, df=278, p<.05$ ) の双方において有意な差がみられた。これらを表化したものが Table 2 である。

本調査においては、Pu.SC と Pr.SC それぞれを 35 以上が高 Pu.SC, 24 以上が高 Pr.SC とした<sup>12)</sup>。高 Pu.SC には 135 人 (男性=12, 女性=123) が該当し、調査協力者全体の 48.6% (男性=26.1%, 女性=53.0%) であった。また、高 Pr.SC には 158 人 (男性=29, 女性=129) が該当し、調査協力者全体の 56.8% (男性=63.0%, 女性=55.6%) であった。こうした数値からも、男性と女性の自己に向ける意識の置き方に違いがあることがわかる。

Table 2 SCS 集計結果

( $N=280$ : 男性  $n=46$ , 女性  $n=234$ )

Pu.SC/Pr.SC	Pu.SC	Pr.SC
調査協力者		
男 性	32.4	29.8
<i>SD</i>	4.67	4.09
女 性	34.5	28.4
<i>SD</i>	4.81	4.02
男女総計	34.1	28.7
<i>SD</i>	4.84	4.06
<i>F</i> 値	.002	.004
<i>t</i> 値	-2.74**	2.15*

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$ , *n.s.*( $p>.05$ ),  $df=278$

## 5. 議論および分析

### A. CA と SC との関係性——全体的な視点から——

本項では、本研究の主題でもある CA と SC の相関を 4.A. と 4.B. で求めた結果をもとに、双方の  $r$  の算出を行い、本論での議論および分析を行う。CA と SC の  $r$  を算出したところ、Table 3 のような結果が得られた。

Pu.SC と CA の総計および各下位尺度のすべての項目に有意な相関が求められた。小集団内での議論や討論の場面と Pu.SC との  $r$  は .25、集会や授業での発言の場面と Pu.SC との  $r$  は .29、1 対 1 の会話の場面と Pu.SC の  $r$  は .22、大勢の人の前でのスピーチの場面と Pu.SC との  $r$  は .19、CA 総計と Pu.SC との  $r$  は .28 であった。すべての項目において、両者に中の弱程度の正の相関がみられた。

一方、Pr.SC と CA の間には、有意な相関はみられなかった。Pr.SC と CA の総計および各下位尺度との  $r$  は以下の通りであった。小集団内での議論や討論の場面と Pr.SC との  $r$  は -.01、集会や授業での発言の場面と Pr.SC との  $r$  は -.03、1 対 1 の会話の場面と Pr.SC との相関係数  $r$  は -.01、大勢の人の前でのスピーチの場面と Pr.SC との  $r$  は -.03、CA 総計と Pr.SC との  $r$  は -.02 であった。すべての項目において負の極めて微弱な相関が示されたが、数値的にはほとんど無相関のレベルであった。

このように、CA と SC の関係を全体的な視点からみると、Pu.SC との間には中の弱程度の正の相関関係があるといえるが、Pr.SC との間には相関関係はないと判断される。こうした結果は、Leary (1983) [リアリィ, 1998] や Buss (1986) [バス, 1997] の指摘を支持する結果ではあったが、Gudykunst & Ting-Toomey with Chua (1988) の主張は支持しないものとなっている。この点について、Gudykunst & Ting-Toomey with Chua (1988) は、Gudykunst, Yang, and Nishida (1987) を援用し、文化的特性の側面から以下のような主張をしている。Pu.SC と連関がみられるのは個人主義的文化 (individualism) であり、米国人を筆頭に英語圏の場合は Pu.SC との関係が考えられるが、Pr.SC と関係が見られるのは男らしい文化 (masculinity) であり、Hofstede (1991) [ホフステッド, 1996] による国際調査で男らしい文化の第 1 位にランクされている日本人の場合、Pr.SC との相関関係が考えられると主張している。しかし、全体的な視点の中では、この点を支持するような

Table 3 CA と Pu.SC および Pr.SC との相関 ( $r$ )

( $N=280$ : 男性  $n=46$ , 女性  $n=234$ )

CA 範疇 SC (Pu.&Pr.)	小集団内での 議論・討論	集会や授業 での発言	1 対 1 の会話	大勢の人の前 でのスピーチ	CA 総計
男性	.02	-.08	-.03	.05	-.01
Pu.SC 女性	.29**	.34**	.26**	.21**	.33**
男女総計	.25**	.29**	.22**	.19**	.28**
男性	-.21	-.32*	-.33*	-.28	-.33*
Pr.SC 女性	.05	.05	.05	.03	.05
男女総計	-.01	-.03	-.01	-.03	-.02

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

結果は示されなかった。性差の観点からデータを見てみると、Gudykunst & Ting-Toomey with Chua (1988), Gudykunst, Yang, and Nishida (1987) の指摘に一部関連するものがみられる。この点に関しては、5.B. の中で紹介し議論する。

前出の通り、Pu.SC と高い相関があるとされている SA について、Gudykunst & Ting-Toomey with Chua (1988) によれば、CA に関する国際比較調査 (e.g. Klopff & Cambra, 1979; McCroskey, 1978; Gudykunst, Yang & Nishida, 1987) と  $r=.50-.70$  という非常に高い数値が示しており、今回の調査で CA と Pu.SC との間に相関関係が弱いながらも示されたということは、SA との関係についても高値が示されるであろうと予測される。また、SA およびその隣接領域である CA に対する Leary (1983) [リアリィ, 1998] や Buss (1986) [バス, 1997] の信憑性の高さを裏打ちするものであったとみることができる。

### B. CA と SC との関係性——性差の視点から——

性差の観点からは以下のような特徴がみられた。男性だけのデータをみても、小集団内での議論や討論の場面と Pu.SC とは  $r=.02$ 、集会や授業での発言の場面と Pu.SC とは  $r=-.08$ 、1対1の会話の場面と Pu.SC とは  $r=-.03$ 、大勢の人前でのスピーチの場面と Pu.SC とは  $r=.05$ 、CA 総計と Pu.SC とは  $r=-.01$  であった。以上のように男性の場合、CA と Pu.SC との間には相関関係はみられなかった。

逆に、女性のデータをみても、小集団内での討論や議論の場面と Pu.SC とは  $r=.29$  ( $p<.01$ )、集会や授業での発言の場面と Pu.SC とは  $r=.34$  ( $p<.01$ )、1対1の会話の場面と Pu.SC とは  $r=.26$  ( $p<.01$ )、大勢の人の前でのスピーチの場面と Pu.SC とは  $r=.21$  ( $p<.01$ )、CA 総計と Pu.SC とは  $r=.33$  ( $p<.01$ ) であった。各下位尺度において中の弱程度の正の相関がみられ、それらが有意な数値であることが示された。以上のように、女性の場合、CA と Pu.SC とは中の弱程度の正の相関関係にあることがみとめられた。

男性の場合、上述のように、Pu.SC と CA との相関関係はみられなかったが、Pr.SC と CA との間に中の弱程度の負の相関係数がみられた。小集団での議論や討論の場面と Pr.SC とは  $r=-.21$  ( $p>.05, n.s.$ )、集会や授業での発言の場面と Pr.SC とは  $r=-.32$  ( $p<.05$ )、1対1の会話の場面と Pr.SC とは  $r=-.33$  ( $p<.05$ )、大勢の人の前でのスピーチの場面と Pr.SC とは  $r=-.28$  ( $p>.05, n.s.$ )、CA 総計と Pr.SC とは  $r=-.33$  ( $p<.05$ ) であった。以上のように、すべての項目にわたり中の弱程度の負の相関関係が示された。特に、集会や授業での発言の場面と1対1の会話の場面、CA 総計の3項目については、有意な数値として示された。しかし、負の相関ということは、CA の高い人は Pr.SC を注視する傾向の低い人、CA の低い人は Pr.SC を注視する傾向の高い人ということになり、Gudykunst & Ting-Toomey with Chua (1988), Gudykunst, Yang, and Nishida (1987) の指摘とかみ合わない。男性については、今後データ数を増やすことにより、この点を明らかにしていきたい。

それに対して女性の場合は、CA と Pr.SC との間にほとんど相関関係はみられない。小集団内での議論や討論の場面と Pr.SC とは  $r=.05$ 、集会や授業での発言の場面と Pr.SC とは  $r=.05$ 、1対1の会話の場面と Pr.SC とは  $r=.05$ 、大勢の人の前でのスピーチの場面と Pr.SC とは  $r=.03$ 、CA 総計と Pr.SC とは  $r=.05$  であった。以上のように、全項目にわたり相関関係がみられない結果となっている。数値的には無相関といえる。

こうした結果から、女性の感じる CA には Pu.SC からの影響が考えられ、男性の感じる CA には Pr.SC からの影響が考えられる。つまり、女性は他者から観察されるうるすべての自己属性、例えば容姿・行動スタイル等を意識する傾向が男性と比べて特に強いため、そうした女性特有の性質が CA に影響を与えていると考えられる。また逆に男性の場合は、他者が直接観察できないその人のみが体験しうる自己の次元、例えば痛みの感覚・感情・動機・思考等を意識する傾向が女性よりも強いため、内側に向く内向的な性格や性質が CA に影響を与えていると考えられるが、今回の調査では双方の間に負の相関が示されており、こうした考え方が上手く当てはまらないものとなっている。また、Pr.SC と CA とが負の相関関係にあるということから、反対に Pu.SC との間に正の相関を想定したが、そうした結果は示されなかった<sup>13)</sup>。男性の数値に関しては、今後、男性のデータ数を増やすことにより明確にしていきたいと考える。

## 6. 結論及び今後の研究課題

本研究は、CA と SC との関係性を検証することを目的とし、調査用紙により収集した量的データに分析を試みたものである。CA そのものについては、これまでの先行調査と同様、全体的に高値の CA を示し、日本人の言語コミュニケーション場面に対する不安感・懸念の程度の高さを再認識させられる数値が示された。また SC についても、これまでの先行調査同様、Pr.SC と比べて Pu.SC の方が高値を示した。本稿では、こうした結果をもとに双方の相関関係に主眼をおき分析を試みた。

その結果、CA と Pu.SC の間に中の弱程度の正の相関がみられた。また、その相関は有意であるという結果を得た。これは、Leary (1983) [リアリィ, 1998] や Buss (1986) [バス, 1997] の指摘する SA と Pu.SC との関係性を支持するものであったが、Gudykunst & Ting-Toomey with Chua (1988) の主張は支持しない結果となった。

また、性差の観点から両者の関係性をみてみると、女性のデータには CA と Pu.SC との間に有意な相関がみられたが、男性のデータにはまったく有意な相関は示されなかった。しかし、男性の場合、集会や授業での発言の場面と 1 対 1 の会話の場面、CA 総計において、Pr.SC との間に有意な相関がみられた。このことから、性により CA の感じ方やその原因が異なるものと推測される。こうした発見は、今後 CA の治療およびトレーニング等を施す際、性の違いにより、その施術のしかたを変える必要性が考えられる。また、そうすることにより、治療およびトレーニングのより一層の効果が期待できることを示唆するものといえる<sup>14)</sup>。

本研究では、Pu.SC と CA との関係性について数値的に確認することはできたが、そこにどのような共通因子が存在しているのかという点については分析が行われていない。そのため、次の段階として、因子分析を行い、その点を明らかにしたいと考えている。また、Leary (1983) [リアリィ, 1998] や Buss (1986) [バス, 1997] の指摘する Pu.SC との相関性が高いとされる SA と CA との関係性の検証も行う必要があると考える。両者の関係性については、本論中でも触れているように、国際比較研究においてその相関については検証されているが、本調査においても同様の結果が得られるのか確認したいと考えている。また、パーソナリティ特性という側面から、CA とシャイネス (shyness) との関係

性について今後調査する必要があると思われる。今回の調査では十分にその証拠を示すことはできなかったが、多分に内向的性質がCAに影響を及ぼしていることは想定される。そのため、CAとシャイネスの間には何らかの相関が示されるものと推測される。これらを今後の研究課題とし、調査を進めていきたい。

**付記** 本稿は、2004年度学園研究費助成金Bを利用させていただき、その研究成果としてまとめたものである。学園関係者には、この場を借りて深く御礼を申し上げる次第である。

## 注

- 1) SCはSAを引き起こすための必要条件であると指摘している。詳細についてはLeary (1983) [リアリィ, 1998] およびBuss (1980) [パス, 1997] を参照のこと。
- 2) 2変数間の関連性や共変関係を調べるためピアソン相関係数( $r$ )を用いた。以下、ピアソン相関係数は $r$ と記す。
- 3) SCには下位区分として公的SCと私的SCがあり(詳細は2.B.参照)、そのどちらがよりCAの各場面(詳細は2.A.参照)と関係が深いのかを検証することが本研究の目的である。
- 4) PRCA-24は、CAを特性としてとらえ測定できるように作成されたものである。McCroskey (1970, 1978, 1982)により何度も改訂され、最終的に現在の24項目の質問形式になった。非常に高い内的整合性を持っており、各調査で示される数値も長年にわたり一定の数値を示している。このことはCAの特性という側面を裏付けしているばかりでなく、その信憑性の高さの証明でもある。
- 5) 例えば、代表的なものには、人前で歌うことに対する不安を測定するものとしてTest of Singing Apprehension: TOSA、人前で字を書くことに対する不安を測定するものとしてWriting Apprehension Test: WAT等があげられる。
- 6) Hofstede, G. [ホフステッド, G.]がIBM社を通じ、50カ国3地域を調査し発見した文化指標の1つ。男らしさの強い文化は、性(gender)による社会的役割分担がはっきりしている・同性間のコミュニケーションは得意であるが、異性間のコミュニケーションは苦手といった特徴がみられる。日本は、男らしい文化第1位にランクされている。詳細については、Hofstede (1991) [ホフステッド, 1996]を参照のこと。
- 7) Hofstede, G. [ホフステッド, G.]がIBM社を通じ、50カ国3地域を調査し発見した文化指標の1つ。高不確実性回避文化は、あいまいなことに対する許容度が低い・はっきりとしたルールを必要とする・逸脱した考えや行動様式に対する許容度が低いといった特徴が見られる。日本の不確実性回避の程度は、第7位にランクされている。詳細については、Hofstede (1991) [ホフステッド, 1996]を参照のこと。
- 8) 基本的には近藤(1996)に則した形であるが、単語・用語のレベルでより平易で具体的な言い方に換えた。
- 9) 本稿で使用したデータの処理結果はAppendixに掲載した。参考にしていただきたい。
- 10) 各下位尺度において算出される数値は、最低6から最高30となる(McCroskey, 1997b)。
- 11) McCroskey (1997b)によれば、低CAは50以下としている。
- 12) Pu.SC, Pr.SCの強さは、基本的には自分の得点が調査対象者全体の平均点より上か下かを基準として考える(押見, 1999)。
- 13) こうしたことは押見(1995)が指摘しているように、Pr.SCとPu.SCは独立性が高いためであると考えられる。両者の $r$ はTurner, Scheier, Carver, & Ickes (1978)の分析では $r=.31$ という

- 報告がある。また押見（1999）によれば、彼らの調査では $r=0.38$ という報告をしている。本調査では $r=.35$ という数値が示された。ともに中の弱程度の正の相関といえる。
- 14) 現在、その治療法の代表的なものとして、系統的脱感作法（Systematic Desensitization）、社会的スキル・トレーニング（Social Skill Training）、認知変容法（Cognitive Modification）がある。

## 引用文献

（英文文献はアルファベット順、邦文献は五十音順に別立てにて表記）

### 【英文文献】

- Andersen, P. A., Andersen, J. F., & Garrison, J. P. (1978). Singing apprehension and talking apprehension: The development of two constructs. *Sign Language Studies*, **19**, 155–186.
- Brockner, J. (1979). Self-esteem, self-consciousness, and task performance: Replications, extensions, and possible explanations. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 447–461.
- Buss, A. H. (1986). *Social behavior and personality*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Daly, J. A. & Miller, M. D. (1975). The empirical development of an instrument to measure writing apprehension. *Research in the Teaching of English*, **9**, 242–249.
- Fenigstein, A. (1979). Self-consciousness, self-attention, and social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47**, 860–870.
- Fenigstein, A., Scheire, M., F., & Buss, A., H. (1975). Public and Private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 522–527.
- Gudykunst, W. B. & Ting-Toomey, S., with Chua, E. (1988). *Culture and Interpersonal Communication*. Newbury Park, CA: Sage.
- Gudykunst, W. B., Yang, S., & Nishida, T. (1987). Cultural differences in self-consciousness and self-monitoring. *Communication Research*, **14**, 7–36.
- Hofstede, G. (1991). *Cultures and Organizations—Software of the Mind—*. London: McGraw-Hill.
- Jung, C. (1933). *Psychological types*. New York: Harcourt, Brace.
- Klopf, D. & Cambra, R. (1979). Communication apprehension among college students in America, Australia, Japan, and Korea. *Journal of Psychology*, **102**, 27–31.
- Lloyd, K., Paulsen, J., & Brockner, J. (1983). The effects of self-esteem and self-consciousness on interpersonal attraction. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **9**, 397–403.
- Mead, G. (1934). *Mind, self, and society*. Chicago: Aldine & Atherton.
- Klopf, D., W. (1997). Cross-cultural apprehension research: Procedures and comparisons. (pp. 269–284). In Daly, J., A., McCroskey, J., C., Ayres, J., Hopf, T., and Ayres, D., M. (Eds.). *Avoiding Communication—Shyness, Reticence, and Communication Apprehension—2nd Edition* Hampton Press, INC. Cresskill, New Jersey.
- Leary, M. R. (1983). *Understanding Social Anxiety—Social, Personality and Clinical Perspectives—*. Beverly Hills, CA: Sage.
- McCroskey, J. C. (1970). Measures of communication-bound anxiety. *Speech Monographs*, **37** (4), 269–277.
- McCroskey, J. C. (1978). Validity of the PRCA as an index of oral communication apprehension. *Communication Monographs*, **45** (3), 192–203.
- McCroskey, J. C. (1982). Oral communication apprehension: A reconceptualization. *Communication Yearbook*, **6**, 136–170. Beverly Hills, CA: Sage.

- McCroskey, J. C. (1997a). Willingness to Communicate, Communication Apprehension, and Self-Perceived Communication Competence: Conceptualizations and Perspectives. (pp.75–108). In Daly, J., A., McCroskey, J., C., Ayres, J., Hopf, T., and Ayres, D., M. (Eds.). *Avoiding Communication—Shyness, Reticence, and Communication Apprehension—2nd Edition* Hampton Press, INC. Cresskill, New Jersey.
- McCroskey, J. C. (1997b). Self-report measurement. (pp.191–216). In Daly, J., A., McCroskey, J., C., Ayres, J., Hopf, T., and Ayres, D., M. (Eds.). *Avoiding Communication—Shyness, Reticence, and Communication Apprehension—2nd Edition* Hampton Press, INC. Cresskill, New Jersey.
- McCroskey, J. C. & Richmond, V. P. (1982). Communication apprehension and shyness: Conceptual and operational distinctions. *Central States Speech Journal*, **33** (3), 458–468.
- Scheier, M. F. (1976). Self-awareness, self-consciousness, and angry aggression. *Journal of Personality*, **44**, 627–644.
- Scheier, M. F., Buss, A. H., & Buss, D. M. (1978). Self-consciousness, self-report of aggressiveness, and aggression. *Journal of Research in Personality*, **12**, 133–140.
- Scheier, M. F. & Carver, C. S. (1977). Self-focused attention and the experience of emotion: attraction, repulsion, elation, and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 625–636.
- Scheire, M., & Carver, C. (1981). Private and public aspects of the self. In L. Wheeler (Ed.), *Review of personality and social psychology: 2*. Beverly Hills, CA: Sage.
- Turner, R. G., Scheier, M. F., Carver, C. S., & Ickes, W. (1978). Correlates of self-consciousness. *Journal of Personality Assessment*, **42**, 285–289.

【邦文文献】

- 押見輝男 (1995) II 「自己の姿への注目」の段階 (pp. 21–65) 中村陽吉編 『「自己過程」の社会心理学』東京大学出版会
- 押見輝男 (1999) 3. 自分に注意を向けやすい性格 (pp. 49–69) 『自分を見つめる自分——自己フォーカスの社会心理学——』サイエンス社
- 近藤真治・ヤン・インリン (1996) 『コミュニケーション不安の形成と治療』ナカニシヤ出版
- 西田司 (1988) 日本人大学生のコミュニケーション不安 『日本大学国際関係研究』第8巻 第3号 171–183
- バス A. H. [大淵憲一監訳] (1997) 『対人行動とパーソナリティ』北大路書房
- ホフステード, G. [岩井紀子・岩井八郎訳] (1996) 『多文化世界——違いを学び共存への道を探る——』有斐閣
- リアリィ M. R. [生和秀敏監訳] (1998) 『対人不安』北大路書房

Appendix

Appendix 1 Pu.SC と Pr.SC の相関 (男性)

		SCS	Pu.SC	Pr.SC
SCS				
	Pearson の相関係数		1	.284
Pu.SC	有意確率 (両側)			.056
	<i>N</i>		46	46
	Pearson の相関係数		.284	1
Pr.SC	有意確率 (両側)		.056	
	<i>N</i>		46	46

Appendix 2 Pu.SC と Pr.SC の相関 (女性)

		SCS	Pu.SC	Pr.SC
SCS				
	Pearson の相関係数		1	.325**
Pu.SC	有意確率 (両側)			.000
	<i>N</i>		234	234
	Pearson の相関係数		.325**	1
Pr.SC	有意確率 (両側)		.000	
	<i>N</i>		234	234

\*\* $p < .01$

Appendix 3 Pu.SC と Pr.SC の相関 (男女総計)

		SCS	Pu.SC	Pr.SC
SCS				
	Pearson の相関係数		1	.291**
Pu.SC	有意確率 (両側)			.000
	<i>N</i>		280	280
	Pearson の相関係数		.291**	1
Pr.SC	有意確率 (両側)		.000	
	<i>N</i>		280	280

\*\* $p < .01$

コミュニケーション不安と自己意識との関係性について

**Appendix 4** SCS 結果

SCS		Pu.SC	Pr.SC
回答者の性別			
男性	平均値	32.37	29.83
	度数	46	46
	標準偏差	4.668	4.090
	平均値の標準誤差	.688	.603
女性	平均値	34.49	28.43
	度数	234	234
	標準偏差	4.809	4.023
	平均値の標準誤差	.314	.263
男女 総計	平均値	34.14	28.66
	度数	280	280
	標準偏差	4.842	4.060

**Appendix 5** PRCA の内的整合性 (男性)

PRCA		1	2	3	4	5
1. 小集団	Pearson の相関係数		.759**	.614**	.651**	.889**
	有意確率 (両側)	—	.000	.000	.000	.000
	<i>N</i>		46	46	46	46
2. 集会	Pearson の相関係数			.635**	.652**	.893**
	有意確率 (両側)		—	.000	.000	.000
	<i>N</i>			46	46	46
3. 会話	Pearson の相関係数				.573**	.804**
	有意確率 (両側)			—	.000	.000
	<i>N</i>				46	46
4. スピーチ	Pearson の相関係数					.842**
	有意確率 (両側)				—	.000
	<i>N</i>					46
5. 総計	Pearson の相関係数					
	有意確率 (両側)					—
	<i>N</i>					

\*\* $p < .01$

Appendix 6 PRCA の内的整合性 (女性)

		PRCA				
PRCA		1	2	3	4	5
1. 小集団	Pearson の相関係数		.791**	.591**	.574**	.884**
	有意確率 (両側)	—	.000	.000	.000	.000
	<i>N</i>		234	234	234	234
2. 集会	Pearson の相関係数			.572**	.660**	.904**
	有意確率 (両側)		—	.000	.000	.000
	<i>N</i>			234	234	234
3. 会話	Pearson の相関係数				.406**	.753**
	有意確率 (両側)			—	.000	.000
	<i>N</i>				234	234
4. スピーチ	Pearson の相関係数					.802**
	有意確率 (両側)				—	.000
	<i>N</i>					234
5. 総計	Pearson の相関係数					—
	有意確率 (両側)					—
	<i>N</i>					—

\*\* $p < .01$

Appendix 7 PRCA の内的整合性 (男女総計)

		PRCA				
PRCA		1	2	3	4	5
1. 小集団	Pearson の相関係数		.787**	.594**	.588**	.885**
	有意確率 (両側)	—	.000	.000	.000	.000
	<i>N</i>		280	280	280	280
2. 集会	Pearson の相関係数			.579**	.661**	.903**
	有意確率 (両側)		—	.000	.000	.000
	<i>N</i>			280	280	280
3. 会話	Pearson の相関係数				.429**	.758**
	有意確率 (両側)			—	.000	.000
	<i>N</i>				280	280
4. スピーチ	Pearson の相関係数					.810**
	有意確率 (両側)				—	.000
	<i>N</i>					280
5. 総計	Pearson の相関係数					—
	有意確率 (両側)					—
	<i>N</i>					—

\*\* $p < .01$

コミュニケーション不安と自己意識との関係性について

Appendix 8 PRCA 結果

		PRCA				
回答者の性別		小集団	集会	会話	スピーチ	合計
男性	平均値	18.26	19.00	16.76	19.91	73.93
	度数	46	46	46	46	46
	標準偏差	5.310	5.194	4.217	5.107	17.052
	平均値の標準誤差	.783	.766	.622	.753	2.514
女性	平均値	19.32	20.54	17.00	21.29	78.15
	度数	234	234	234	234	234
	標準偏差	5.151	5.012	4.664	5.485	16.997
	平均値の標準誤差	.337	.328	.305	.359	1.111
男女 総計	平均値	19.15	20.29	16.96	21.06	77.46
	度数	280	280	280	280	280
	標準偏差	5.183	5.066	4.587	5.440	17.048

Appendix 9 CA と SC の相関 (男性)

		PRCA				
SCS		小集団	集会	会話	スピーチ	合計
Pu.SC	Pearson の相関係数	.015	-.078	-.029	.051	-.011
	有意確率 (両側)	.922	.607	.847	.738	.941
	N	46	46	46	46	46
Pr.SC	Pearson の相関係数	-.211	-.316*	-.325*	-.277	-.325*
	有意確率 (両側)	.160	.032	.028	.062	.027
	N	46	46	46	46	46

\* $p < .05$

Appendix 10 CA と SC の相関 (女性)

		PRCA				
SCS		小集団	集会	会話	スピーチ	合計
Pu.SC	Pearson の相関係数	.288**	.344**	.263**	.205**	.327**
	有意確率 (両側)	.000	.000	.000	.002	.000
	N	234	234	234	234	234
Pr.SC	Pearson の相関係数	.045	.047	.046	.031	.050
	有意確率 (両側)	.492	.472	.480	.638	.443
	N	234	234	234	234	234

\*\* $p < .01$

Appendix 11 CA と SC の相関 (男女総計)

		PRCA				
SCS		小集団	集会	会話	スピーチ	合計
Pu.SC	Pearson の相関係数	.252**	.288**	.221**	.194**	.284**
	有意確率 (両側)	.000	.000	.000	.001	.000
	N	280	280	280	280	280
Pr.SC	Pearson の相関係数	-.008	-.028	-.012	-.029	-.023
	有意確率 (両側)	.899	.637	.843	.634	.701
	N	280	280	280	280	280

\*\* $p < .01$

Appendix 12  $t$  検定結果 (SCS)

		等分散性のための Levene の検定				2つの母平均の差の検定				
		F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差	差の標準偏差	差の95%信頼区間	
								下限		上限
Pu.SC	等分散を検定する	.002	.965	-2.743	278	.006	-.118	.772	-3.637	-.598
	等分散を検定しない			-2.798	65.185	.007	-2.118	.757	-3.629	-.606
Pr.SC	等分散を検定する	.004	.949	2.150	278	.032	1.399	.651	.118	2.679
	等分散を検定しない			2.126	63.308	.037	1.399	.658	.084	2.713

Appendix 13  $t$  検定結果 (PRCA)

		等分散性のための Levene の検定				2つの母平均の差の検定				
		F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差	差の標準偏差	差の95%信頼区間	
								下限		上限
小集団	等分散を検定する	.000	.994	-1.269	278	.206	-1.060	.835	-2.703	5.84
	等分散を検定しない			-1.243	62.775	.218	-1.060	.852	-2.763	.644
集会	等分散を検定する	.042	.838	-1.892	278	.060	-1.538	.813	-3.139	.062
	等分散を検定しない			-1.847	62.581	.069	-1.538	.833	-3.203	.126
会話	等分散を検定する	.213	.645	-.323	278	.747	-.239	.741	-1.698	1.220
	等分散を検定しない			-.345	68.473	.731	-.239	.693	-1.621	1.143
スピーチ	等分散を検定する	.530	.467	-1.574	278	.117	-1.378	.875	-3.100	.345
	等分散を検定しない			-1.652	67.058	.103	-1.378	.834	-3.042	.287
総計	等分散を検定する	.009	.923	-1.537	278	.126	-4.215	2.743	-9.614	1.185
	等分散を検定しない			-1.533	63.825	.130	-4.215	2.749	-9.706	1.277